

# プロセス・アプローチで 自律的に書く・話す力を育てる

興津 紀子  
(宮崎大学)

内容解説資料は  
こちらから  
ご覧いただけます



## はじめに：全国学力・学習状況調査からみえた課題

令和5年度全国学力・学習状況調査では、日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くタスクが出題された。正答率は7.7%で、取り上げたテーマについて具体的に説明していない解答、話題が次々に変わるなど内容に一貫性がみられない解答、問題の趣旨を捉えられていない解答などが報告されている。また、社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すタスクも出題され、正答率は4.2%だった。理由を述べていない解答、話し手の意向を踏まえられていない解答が見られ、「話すこと」と「書くこと」の課題が浮き彫りになった。調査で問われた力は一朝一夕に身につくものではないため、書いたり話したりするプロ

セスを身につけられるよう、3年間を通してくり返し指導をする必要がある。プロセス・アプローチは、最終プロダクト（例：提出された作文、発表本番）だけでなく、**構想、計画、修正などを含むプロセス（手順）を重視し、生徒が自律的な書き手・話し手になるように支援する指導方法**である。近年は、読み手・聞き手のニーズを踏まえたプロセスが重視されている。NEW CROWNのWrite / Speakが出口になっているGoal Activityでは、読み手・聞き手を意識して、内容と伝え方に創意工夫を凝らすためのプロセスが示されている。本稿では、2つのGoal Activityを例にして、プロセスを指導する際に必要な支援方法を紹介する。

## 「書くこと」のプロセス・アプローチ



「書くこと」のプロセス・アプローチには、**「発想→計画→下書き→読み直し→推敲」**の段階がある。1年Lesson 6のGoal Activityをみてみよう。

### (1) 読み手のニーズを知り、書く目的を明確にする

まず、SETTINGを確認する。英文を書く目的や場面、状況などを知ることは、自分の置かれた立場と読み手のニーズを理解する上で重要な手続きである。ケビンからのメールの内容について、“What is Kevin’s request?”と生徒に問いかけ、返信する目的を明確にしたい。

### (2) 他者のプロセスやモデルのライティングから学ぶ

二次元コードなどから視聴できるWatchの動画では、メールの差

出人であるケビンのライティング・プロセスをたどれる。活動の全体像がつかめるため、見通しを持って作業に取り組むことができる。また、書かれた内容を整理するReadに取り組む際に、ケビンのメールの形式や段落の構成を分析させて、自分が書くときに生かせるようにするのもよいだろう。

### (3) プロセスを意識して書く

#### Step 1 発想

紹介する話題をしぼる際に重要な視点は、「読み手の興味・関心」である。教科書本文に戻り、日本とアメリカの学校生活の共通点や相違点を確認したり、インターネットで調べさせたりして、どの話題を選べば読み手に興味を持ってもらえるのかを考えるよう指導する。

#### Step 2 計画

前述の調査結果では、取り上げたテーマについて具体的に説明したり、内容に一貫性をもたせたりする指導の必要性が示唆された。この段階では詳しく説明するための支援が必要だろう。写真を描写するキーワードと、それに関連した日本の学校生活の特徴を挙げて、説明の順序を考えたり、情報を補ったりするよう指導する。数人の生徒のメモを見せて解説するとイメージしやすいかもしれない。

#### Step 3 下書き

現在進行形と現在形を書き分けるように伝えるが、この段階では完璧さを過度に意識させず、ペースよく書き進めるように伝える。

#### Step 4 読み直し・推敲

時間はかかっても、推敲の段階を必ず入れるようにする。書き終わった生徒には、内容面と言語面に注意して読み直すように伝える。多くの生徒が同じ誤りをしている場合は、全体で共有し、自分で誤りに気

づき、修正できるようにサポートする。教師からのフィードバックを受けて書き直すまでが、一連のプロセスである。また、作文をペアで読み合って、学び合うことも効果的だ。

## 「話すこと[発表]」のプロセス・アプローチ



私たちが話す際、[概念化（何を話すか考える段階）→言語化（どのような言語材料を用いて伝えるか決める段階）→調音化（実際に音声化する段階）]のプロセスを、限られた時間の中で瞬時に実行している。2年Lesson 5 Goal Activityでは、このプロセスを分けて準備したりふり返ったりする。ここでは、前述の1年Lesson 6で紹介したライティングの留意点を省略し、スピーキング特有の指導の留意点を中心に紹介する。

### (1) 聞き手のニーズを考え、目的意識を高める

SETTINGを読んで、目的や場面、状況などを明確にしたあと、どのような理由で旅行者が自分の町や地域に来るのかを考えさせる。例えば、ALTに尋ねたり、インターネットで旅行者のニーズを調査したりすることが考えられる。観光案内所、国際交流センターなどで動画を上映してもらえば活動の目的意識と意欲がさらに高まるだろう。

### (2) 利用できるリソースを入手する

Watchの動画を視聴し、モデルスピーチの内容と構成を分析し、発表をイメージさせる。WatchやALTのモデルスピーチ動画などを

タブレットに保存し、生徒がいつでも参照できるようにするなど、必要なリソースを選択して自律的な学習ができるよう支援したい。

### (3) プロセスを意識して話す

#### Step 1 Step 2 概念化・言語化の計画

動画撮影時の発表の質を高めるために原稿を書かせて準備することが多いかもしれない。原稿があると原稿を読むだけの発表になってしまうこともあるため、メモを用意して、考えながら話す機会を増やしたいところである。メモは、Step 1の表を活用するとよいだろう。

#### Step 3 Step 4 調音化の練習・修正

Watchを再度視聴し、音声面（リズム、抑揚、ポーズ、スピード）の特徴を分析させ、自分の発表に生かすように指導する。自分の発表を録画し、それを見て改善点に気づかせることは、自律性を育む上で大事なステップである。数人の生徒に発表してもらい、よい発表のイメージを共有することも効果的である。

#### Step 5 概念化・言語化・調音化の一連のプロセス

動画撮影の前に、グループを変えて数回発表すれば、回を重ねるごとに流暢に話せるようになったり、失敗を取り戻したりすることができる。聞き手から質問や感想をもらい、英語で応じることも即興性の育成につながる。また、今回のプロセスをふり返り、次の活動をより洗練されたものにできるようにしたい。

生徒は試行錯誤を重ねて、書いたり話したりするプロセスを実行していく。その過程で教師のサポートは欠かせない。適時に問いかけや助言を与えて生徒が解決策を見出せるように導いたり、協働的な学習を促進して互いに考えを深められるよう支援したりして、生徒を自律的な書き手や話し手に育てていくことが重要である。

## NEW CROWNとわたし

### “Good night, Peter.”

平成24年度版の2年生はLesson 2と3で地球を題材にしていたので、平成28年の改訂版ではどちらかを『ピーターラビットのおはなし』と差し替えることになった。複数の編集委員でその原稿を準備することになり、私も原稿を作成して提出した。私はマグレガーさんがピーターの失くした上着と靴を案山子に着せる場面から最後までを翻案した。そしてお母さんの言葉は“One table-spoonful to be taken at bed-time.”と、具合が悪くなったピーターに薬としてのカモミール茶を飲ませる原文のままとした。しかし編集委員会は私の案を軽く一蹴し、代わりに原文全体を翻案して、最後は“Good night, Peter.”とお母さんが優しくピーターに声掛けすることにして、日々様々な体験をしている日本の中学2年生の心も癒してあげたいと決まった。このお母さんの声掛けは現在まで続いている。良い決定であった。



松沢 伸二  
(新潟大学)